

# 助産師外来における通訳者の介入行為 —通訳を介した相互行為の会話分析—

飯田 奈美子

日本学術振興会

naimeil972@gmail.com

## **Interpreter's Intervention in the Midwifery Outpatient Clinic : Conversation Analysis of Interactions in Conversation through an Interpreter**

**IIDA Namiko**

Japan Society for the Promotion of Science

Keywords: Interpreter's Intervention, Midwifery Outpatient, Conversation Analysis

### 1. はじめに

医療通訳実践において、通訳者は「訳出行為」だけでなく、「介入行為」も行っている。通訳者の介入行為は、通訳規範や通訳倫理の「正確性・公平性」から逸脱するものだが、通訳者自身がコミュニケーションの調整やケア的支援としての介入を行うことが明らかにされている（飯田 2016）。このような介入行為は通訳者個人の経験値によって行われており、適切な介入行為か否かがわかりにくいという問題がある。また、通訳者の介入行為には、対人援助の専門家－クライアント間の力の非対称性から生じる構造的なコミュニケーションの問題に介入するものがあり、これは公平なコミュニケーション成立に重要な役割を果たすものであるのだが、どのような介入行為がどのような状況で生起され、どのようにコミュニケーションの課題の達成に貢献しているか、その実証的な研究は十分に行われていない。

そこで、本研究では通訳実践中に行われる通訳者の発話の訳出ではなく、通訳者がさまざまな戦略をもって行う介入行為を分析し、通訳者がその場の相互行為の組み立てにどのように関わっているのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、助産師外来において通訳を介したブラジル人妊婦・家族と日本人助産師が体重管理指導のやりとり場面で、コミュニケーションの調整のために行われる通訳者の介入行為を詳細に記述する。そ

の際、その場に参与している4者がどのようなタスクを持ちでどのような戦略でその場のコミュニケーション課題の達成に向けて指向しているか、そして、4者で協働達成を行おうとしている活動のなかで、通訳者がどのような役割を担い介入行為を行っているか分析する。これにより、刻一刻変化するやり取りの状況の中で、自らのタスクを認識し、それらを独自の戦略で解決しながらコミュニケーション全体の課題を達成させようと活動している通訳者の行為を明らかにする。

## 2. 研究の背景と研究方法

### 2-1 研究の背景

日本に在住するブラジル人の多くは定住の在留資格を得て外国人労働者として就労しており、家族を帯同し日本で出産育児を行う世帯も少なくない（高橋他 2007）。外国人労働者として来日しているブラジル人妊婦は工場労働者が多く、立ち仕事や重い物を運ぶ仕事に従事し、夜勤や残業を行う者もいる。しかも、派遣での就労形態が多いため、妊娠に伴う配置転換ができない、育休が取れない者もいる。このようなブラジル人妊婦の食生活の傾向としては、昼間は工場の弁当、朝と夜はブラジル料理を作って食べるが、甘いものを好む傾向にあり、ジュース、チョコレートなどを好んで飲食することが多いとされている（畑下 2020, 植村他 2012）。

在日ブラジル人妊産婦に対する母子保健支援についての調査では、日本の産後ケアに関して戸惑いながらも満足し、母国語版パンフレットや母国者コミュニティに支えられていること（杉浦 2008）、また、経済的支援施策などは肯定的に評価するが、母乳育児や妊娠中の体重増加制限については不満や疑問を抱いていることが報告されている（杉浦 2009a, 2009b）。

外国人妊婦が助産師外来など母子保健支援を受ける場合には言葉の壁があり、通訳支援が必要となるが、十分な通訳サポートを受けられない場合も多く、サポートのない外国人妊産婦が不安や寂しさを感じていることが報告されている（伊藤他 2004, 山下他 2012）。出産・育児に対する考え方は各々のもつ文化背景に深く根差すものである。特に妊婦の体重管理は生活・食習慣や文化的背景によってとらえ方が異なり、安全な分娩のために体重管理の重要性を認識してもらうために、両者の文化的専門的知識の差を埋める通訳者の介入行為が多くみられると予測されることから、助産師外来場面の通訳を介したやり取りに焦点化し調査を行うことにした。

### 2-2 研究方法

外国人集住地域にある有床診療所（産婦人科）の助産師外来において、助産師と外国人妊婦・家族の会話を病院に勤務している通訳者が通訳をしている場面をビデオ録画・ICレコーダーで録音し、会話分析にて分析を行った。調査期間は予備調査（参与観察）も含め2018年1月～12月で、計7場面を録画した。そして、収集したデータのテープ起こしを

行い、会話分析の方法に則ったトランスクリプトを作成し、主に栄養指導を行う場面を中心に分析した。調査に参加した助産師は全て日本語母語話者で6名、妊婦・家族は全てポルトガル語母語話者で7組である。通訳者は1名でポルトガル語母語話者である。なお、本研究は立命館大学研究倫理委員会の承認を受け、調査対象者、調査協力医療機関には研究内容を説明し、全ての調査参加者・医療機関の同意を得てから調査を行った。

### 2-3 会話分析とは

会話分析は、エスノメソドロジー<sup>1)</sup>を基盤に、Sacks を中心とする研究者たちによって1960年代後半以降に発展してきた研究領域、分析方法である。会話分析では、人々はお互いに何をしているのかをその都度、理解できるような形で行為を構成しているとみる。そして認識可能な行為として構成されるのは、刻一刻変化する状況の意味に照らしてであり、ある行為が認識可能な形で産出されると、それは新たな状況を作り出し、しばしば次の行為に対する新たな期待が生み出される。そして、行為に対する反応が相手から返されることで、その行為がどのように理解されたかがわかるとする(串田他 2017: 32 - 33)。会話分析の中心的な問いに「Why that now? (今、なぜそれを?)」がある(串田 2006:191)。特定の組み立てによる特定の行為(=それ)が、特定の時点の局所的な文脈(=今)で、生じたのかを問題にするという基本姿勢を述べている。つまり、発話組み立てと会話上の位置が採用される合理性や適切性はどのように可能になっているのかを追求していくのである。

通訳研究において、このような会話分析の概念を用いて分析することで、「通訳」という行為がどのような秩序にそって行われているかを明らかにすることができる。特に、通訳者が訳出以外の行為——通訳規範・倫理から逸脱する行為——について、「今、なぜそれをするのか?」と問い、刻一刻変化する状況の中で、どのような期待のもとにその行為が産出され、またその行為を参与者たちがどのように理解し反応を示しているかを詳細に記述することができる。

本研究では、その場その場で局所的に発生する参与者間でのタスクを通訳者がどのような戦略<sup>2)</sup>をもって介入行為を行っているか、そのような戦略の一連の行為の一つとして、介入行為(自発的発言)が産出されている「位置と組み立て(position and composition)」(Schegloff 2007: 81)を詳細に記述し考察していくことで、「通訳行為」を紐解いていく。

### 3. 通訳者の介入行為に関する先行研究と介入行為の定義

通訳者の介入行為に関する研究には、新崎(2010)、Wadensjö(1998)、Angelelli(2004, 2011)の研究があげられる。新崎は介入行為について、自発的発言という用語を用いている。新崎は、通訳規範や通訳倫理の「不変・不介入原則」からの「逸脱行為」を、「非主体的な逸脱」と「主体的な逸脱」の二つに分類し、「非主体的な逸脱」は主に通訳者の技術力

の不足や環境的な阻害要因により起こるもので、これに対して「主体的な逸脱」には通訳者の意思が働いており、「逸脱的な」訳語選択による情報の追加、情報の消去、情報の修正、訳出以外の自発的な発言に分けられるとしている(新崎 2010:15).

通訳者が通訳実践中に訳出行為ではなく、自らの言葉話すことについての先行研究は、通訳者の仲介、もしくは介入という行為として研究されている (Pöchhacker 2004=2008 : 66-68, 177-180). Angelelli は、通訳者の介入を「通訳の可視化」と呼び、通訳者の役割が言語切り替えを超えたものになることを意味している (Angelelli 2011:425). 可視化には、①言語的な境界や文化的なギャップの伝達、②メッセージと情動の伝達、③会話の参加者間の信頼の構築、④お互いの尊重、⑤会話における安心、⑥両者の会話のバランスを取る、⑦どちらか一方の擁護もしくは協力、⑧情報の管理という特徴を述べている (Angelelli 2004:11). さらに、可視化には会話の参加者の間にある文化や情動などの様々なギャップを安心や尊重によって埋める行為であり、通訳者の介入パターンを①連帯感と権力、③省略・付加による編集、④発話の主体者としての通訳者、⑤理解の促進者としての通訳者、の4つにまとめている (Angelelli 2011:425).

また、Wadensjö は訳ではない通訳者の発話を「non-renditions (翻訳ではない発言)」と呼び、通訳者の介同行為について述べている。Wadensjö は、通訳者の発話の多くは元の発話の定式化として分析可能であるため「renditions(翻訳)」と名付け、これは通訳者が発声した発話に対応する一連のテキストで直前のオリジナルに関連するものとしている<sup>3)</sup> (Wadensjö 1998 : 106). そして、renditions には、Close renditions(等価的翻訳)、Expanded renditions(拡張翻訳)、Reduced renditions(縮小翻訳)、Substituted renditions(代替翻訳)、Summarized renditions(要約)、Two part or multi part renditions(複数構成翻訳)<sup>4)</sup>、non-renditions(翻訳ではない発言)、zero renditions(翻訳なし)の8つのカテゴリーがあるとしている。non-renditions は、元の発話に翻訳として対応しない通訳者のイニシアチブまたは応答として分析可能なテキストで、zero renditions とは参加者の発話がなされているが、元の発話に対しての訳出がされないものである (Wadensjö 1998 : 108).

Cirillo (2012) は、通訳者が zero renditions と non-renditions を用いて会話のイニシアチブを握った場合に、どのようにして医師と患者の会話における感情的なコミュニケーションを促進または阻害するかを調査した。そして、non-renditions と zero renditions は参加者間の直接の接触を促進する場合と妨げる可能性があることを指摘している。しかし、zero renditions と non-renditions のカテゴリーは、通訳を介した医師と患者の相互作用の複雑さを説明できないと述べる。その理由として、non-renditions は、非言語的行動によって表現されること、または他の時点で訳出される可能性がことや、または相互行為に関連付けられた推論的なフレームワークによって指示されることがある。同様に zero renditions も、参加者の中にバイリンガル能力を有する者がいる場合、通訳する必要がない場合や、または通訳者が自分自身に宛てたものであると見なされる場合などがあるとし、

この2つのカテゴリーで分類する限界を述べている。

Cirillo が述べるとおり、相互行為の複雑さをカテゴリー化していくことには限界があるだろう。そもそも Wadensjö が提唱した「renditions」は、元の発話を文脈にもとづきながら、目標言語での新しいバージョンの再コンテキスト化を目指すものとして通訳行為を新たに名付けたものであるが、そのカテゴリーは通訳の翻訳機能を重視したものとなっている。果たして、翻訳機能を重視したカテゴリーにおいて、通訳者が行っている文脈依存的で相互反映的である介入行為の実態をとらえていくことが可能であるのだろうか。

通訳者の介入行為は、会話の参与者との協働達成を行おうとしている活動のなかで行われており、通訳者だけの働きで成立されるものではない。その場のさまざまな状況に応じて、自らも含めた参与者たちの役割や目的を理解しながら、コミュニケーション全体の課題を達成させようと活動しているのである。まずは、実際の通訳データを用いて、どのような状況のもとに介入行為が行われているかについて、詳細に分析することが必要である。そして、このような介入行為を詳細に記述することにより、先行研究で示されたカテゴリー化では、とらえきれない通訳行為の実態を明らかにすることができると思う。

そこで、本論では、介入行為を以下のように定義し、実際の通訳データを用いた分析を試みる。介入行為とは、会話の参与者がその場面のコミュニケーションの課題の達成に向けて指向しながら相互行為を行う中で、通訳者もその場のコミュニケーションの課題に指向して、その場その場で局所的に生じるコミュニケーションのタスクを解決するために行う、訳出以外の行為であり、このような介入行為には、通訳者が自ら発話するものから、ノンバーバルな行為まで含まれるものである。

## 4. 事例

### 4-1 事例概要

この事例は、助産師による妻（妊婦）の体重管理指導場面である。会話の参与者は、助産師、妻、夫、通訳者である。妻は 42 歳のブラジル人、妊娠 33 週で妊娠時より体重が 10 キロ増加<sup>5)</sup>、血圧 140 で少し高めの状態である。日本語レベルは日常会話程度の聞き取りが可能である。夫はブラジル人で日本語レベルは日常会話の聞き取り、話すことが可能である。助産師は日本人でこの病院に 20 年以上勤務している。通訳者はポルトガル語母語話者でこの病院に 25 年以上通訳者として勤務している<sup>6)</sup>。

この助産師外来での面接内容は、妻の体調や第 1 子の出産状況等について助産師の聞き取り・助言が行われた後、妻・夫からの質問がなされた。この時、夫から妻が出産時の痛みが我慢できるか心配だという話がされた。それに対して助産師が「体力的な問題と体重はセーブすべき」と助言を行い、これにより助産師による体重管理指導が始まった。下記で示すトランスクリプト以前の会話では、前回の出産時に血圧が上がったことがあり、「体重にしっかり向き合った方がいい」と助産師より話され、体重管理の重要性を妻に認識してもらうことがここでのコミュニケーション課題になっていった。



したがって、この場面では望ましい体重増加より超過している妻に対して、安全な分娩を行うために体重管理の必要性を妻に理解してもらうというコミュニケーション課題の達成を指向して、助産師、夫、妻、通訳者により相互行為が行われている。そしてその課題達成に向けたやり取りの中で、助産師、妻、夫がそれぞれの立場の主張がされることによって、さまざまなタスクが発生している。通訳者はその場で生起する、参与者の微妙で複雑な立ち位置や主張、状況の変化に対して、訳出を行いながらコミュニケーション課題の達成できるように、タスクの解決にむけていくつかの戦略をもって介入を行っているのである。

なお、助産師、妻、夫、通訳者の座席位置を下記図1で表した。

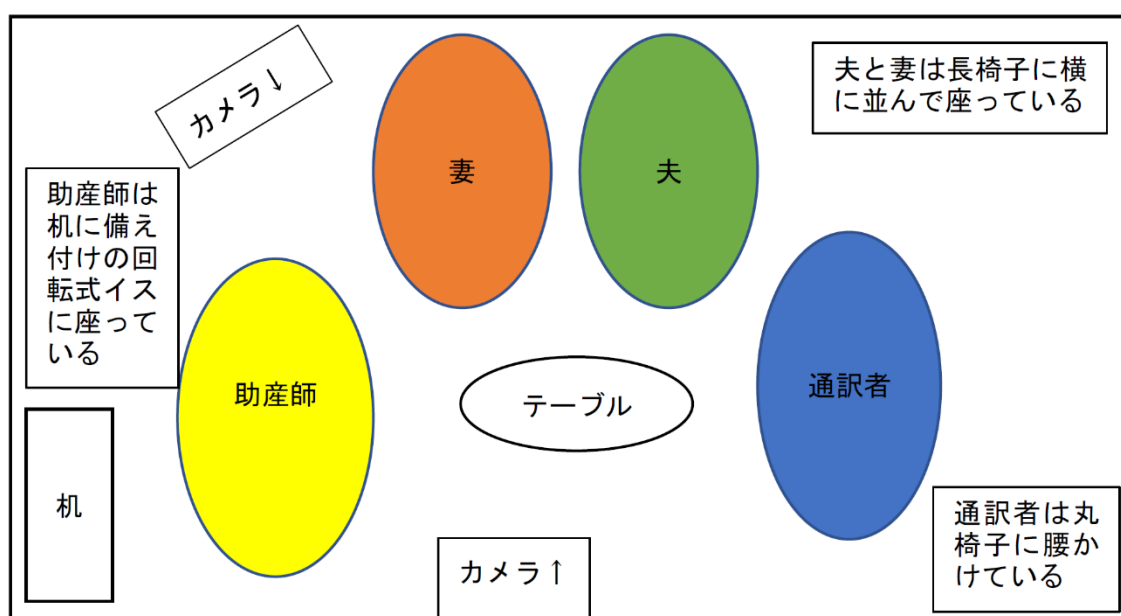


図1：助産師、妻、夫、通訳者の座席位置

#### 4-2 事例のトランスクリプト<sup>7)</sup>

以下のトランスクリプトの抜粋は、助産師外来にて助産師による体重管理指導が行われている場面である。抜粋場面の直前は、助産師から妻の食事内容の聞き取りと食事のとり方について助言が行われていた。その直後の会話が57行目から始まる。

下記の抜粋では、助産師、妻、夫、通訳者の発話と視線や身体動作も分析対象とするが、紙幅の関係から分析対象としている視線の動きや身体動作の表記のみを発言の下段に記載する。なお、参与者の表記は以下の通りである。M→助産師、I→通訳者、P→妻、H→夫、IJ→通訳者の日本語発話(訳出含む)、IP→通訳者のポルトガル語発話(訳出含む)。日本語訳は[]で、ポルトガル語発話の後ろまたは、下に記載している。なお、トランスクリプトに使用している記号については、文末付記を参照のこと。

【抜粋】

57M =あと、>お菓子とか食べてないですか？<

58IP Come outras coi[sas? Bolachinha? [他のものを食べていますか？クッキー？]

59H [Biscoito, [ビスケット,]

60IP +Biscoitinho?+ [ビスケットを少し？]

P +H-----+小さくうなづく

H +大きくうなづく

61H gosta, °muito°. [すごく好きなんだ]

62IJ 食べます.

63P +Mas+[.]hhhhh [でも,]

M+手を大きく振りあげる

64H [hahahahaha

65P +Mas eu como não [toda hora. [でも, 私はずっと食べてはいない.]

P+H-----

H+P-----

66H +[Riz.biscoito [リッツ・ビスケット]

H+ 右手の指をつまむ

67P +Eu como quando chego do+ [trabalho. [仕事から戻ったときに食べる]

P +H-----

H +P-----

I +P-----

68H +[Mas ela não+consegue calcular +no final do dia,  
[しかし, 彼女は一日の最後までのことを計算できてないんですよ,]

P+I-----

H+I-----

H+ 右手を顔の前でつまんだり動かしたりする

I + Pをみて数回うなづく+H-----+Hを見てうなづく

69H enten[deu? +Porque ela pensa que se comer um pedaço, ela não sabe se outra  
[わかりますか？なぜなら彼女は1枚しか食べていないと考えているけれども, 彼女は,

P +I-----

H +I-----+右手-----

H + 右手を顔の前でつまんだり動かしたりする

I +H-----

70I [Aha::n

70H de:de:de:+de caloria que tem num pedaço de +pão grosso que, de caloria que tem.

厚いパン1枚に他のカロリーが加わっていることがわかっていないんだ。カロリーはある。]

P +I-----+H-----

H +右手-----+I-----

H + 右手を顔の前でつまんだり動かしたりする

I +H-----

【71-77中略】

78IP +E manteiga tem, eentão.+ [そして、バターも、そうね、それじゃあ]

H +I-----+P

79P +Bolacha? [クラッカー?]

P +H-----

H +P-----

80H +É bolacha. [そう、クラッカー]

P +H-----

81IP Bolachae. [クラッカー]

82H +Tudo que você, quando eu falto na sua mesa, +que você salta comigo

[私があなたに話すこと全て、私が食卓にいないとき、あなたは私を軽視する

P +H-----

H +両手を動かしながら、Pを見て話す-----

I +少し横(助産師)の方を見る

83H não tá cuidando só vai engordar, eu não tô brincando.Se tiver, comia.

気を付けてないから、ただ太っていく、私は冗談で言っているわけではない。あれば食べてしまう。]

P H-----

H P-----

I H-----

84IP +unn

I +何度かうなずきながら視線を夫から徐々にずらしていく

85H [((不明 ))]

86IJ [で、旦那さんが+, 厳しく、炭水化物取り過ぎて言ってる:ん, ですが↑(.]

P I-----+息を吸う-----

H P-----I-----

I M-----

87IJ ほんと、それは本気にしてもらったほうがいいよって言いました。

88M +ほん、あ::, そう。+で、>お菓子も食べてるんだよね<.

89IJ あ、+リッツというのを。



90H [不明]

91M [リッツ, お.....]92IJ =今, +まだ仕事としているので.

P I-----

I M-----

I +右手をPに向ける

93IP =[Depois que volta do trabalho tá cansada quer comer um pouco né?+

[仕事から帰ってきた後, 疲れてちよつと食べたくなるよね?]

P I-----+うなずき口角上げる

I P-----+Pにうなずく

94M [ふ::ん

95M リッツはすごい食べる↑

## 5. 分析

本章では、局所的に発生する参与者間のタスクを詳述していき、それに対応する通訳者の介入行為が、「なぜこの位置でこのような組み立てによってなされているか」を解明していく。特に、92,93行目の通訳者の自発的発言に注目する。92行目は、通訳者が助産師に対して、93行目は妻（妊婦）に対して行った発話である。これらの発話は訳出行為ではなく、通訳者のコミュニケーション調整のための介入行為と考える。このような介入行為がどのような状況で生起し、それはどのようなタスク解決のために必要であったかを考察する。しかしながら、介入行為は通訳者だけの力で成り立っているのではなく、参与者それぞれが、その場のタスク解決を行う上で、必要な役割を担い、それに伴う戦略を実践している。そのような構図の中で、通訳者はその場で生起するそれぞれの役割を理解し、協働する中で介入行為を行っている。本章では、そのような参与者間の行為、タスク、戦略について詳細に記述していき、次章にて、通訳者の介入行為がどのような意味を持つかを考察していきたい。以下では、7つの通訳者の介入行為、①NGワード(お菓子などの単語)を使用しない訳出(57-63行目)、②聞き手になることを選択(63-68行目)、③気苦労をする夫を労わる(68-78行目)、④夫の発話を受け取ってから、訳出を行う(78-86行目)、⑤夫の発話内容を要約して助産師に伝える(86-88行目)、⑥コンフリクトの回避(92行目)、⑦妻に対する理解の表示(93行目)、について分析を行う。各分析のあとに、参与者がそれぞれ行った行為、その行為のタスク、そのタスク達成に向けた戦略についてまとめた表を記載する。なお、以下では行数を#で示す。

### ① NGワード(お菓子などの単語)を使用しない訳出 (#57-63)

トランスクリプト開始前のトピックは、助産師から食事内容や食事をどのように取っているかについての聞き取りと食事の取り方(パンの摂取の仕方)の助言がなされていた。

それが終わり、食事のとり方のトピックの続きとして、#57「あと、お菓子とかたべてないです？」という質問が助産師からなされる。「あと」は接続詞的に「それから」という意味で用いられており、前で述べた内容に対してあとで述べる内容が順序的に次にくることを指す。したがって、このトピックにおいてもお菓子などの食べている内容の確認とその食べ方についての聞き取りと助言という連鎖が行われることが予想される。通訳者は「Come(食べる)outras(その他) coisas(物)? Bolachinha (クッキー)? (日本語訳: 他のものを食べていますか?クッキー?)」と訳出し、助産師の発言意図を理解した訳出になっている。それは夫の発話 (#59) でビスケットと返答していることから認識可能である。

そして、#60 で通訳者は妻に「ビスケットを少し？」と確認をとった。まず、通訳者は助産師の質問 (#57) に答えるべき権限を持つのは妻であると認識し、夫の応答があるにも関わらず妻に確認を行っている。その際に「少し」という表現を加えることで、妻に対する配慮を表している。そして、妻は夫に比べ小さくうなずいている。これは、妻がビスケットを食べていることは非難されることだと理解していることを示している可能性がある。

そして、#62 で通訳者は「食べます」とだけ述べる。この通訳者の発話は#59 の夫の発話の「ビスケット」という情報を伝えておらず、あえて「お菓子」や「ビスケット」という単語を使用しない戦略をとっていると考える。それは、ビスケットを食べていると発話したのはこの質問のメインの回答者ではない夫であり、妻は小さくうなずきだけで積極的にその回答に同意をしているわけではないこと。また、前段の食事のとり方の聞き取り・助言の場面で、妻はパンが好きでよく食べることが夫から話され、それに対する注意・助言が助産師からされた直後の質問であったことである。パンをよく食べている上にビスケットも食べていることは体重増加の原因となるため、助産師の非難の対象となる可能性がある。通訳者はこのように妻の微妙な立ち位置を理解し、お菓子やビスケットというワードを使用せずに「食べます」とだけ述べたのだと考えられる。

そして、この行為の適切性は、助産師の行為にも表れている。#63 で助産師はややオーバーに両手を振り上げる行為（驚きの反応を表す）を行い、妻がお菓子などを食べていることに対する評価を示している。助産師のこの反応は、食べるという情報を新しい情報として受け取ったことでの驚きではない。助産師は前段のやり取りで妻が食べている物や一般的なブラジル人妊婦の食志向について知っていることからお菓子などを食べているということは予測可能なこと<sup>8)</sup>であり、したがって#63 の反応はマイナス評価を表す行為となっているのだ。しかし、ややオーバー気味に反応を示すことで、その深刻度を下げているのである。

表 1. ①NG ワードを使用しない訳出 (#57-63) 助産師, 妻, 夫, 通訳者の行為・タスク・戦略

参与者	行為	タスク	戦略
助産師	どのような食生活を行っているかの聞き取り活動の中で、お菓子などを食べているかの確認.	妻のお菓子などの摂取状況の確認と同時に、体重増加の要因を探し、妻に体重管理の重要性を理解してもらう.	体重増加要因のお菓子を食べていることを直接的に非難するのではなく、少しオーバーにジェスチャーをし、深刻度を軽減させる.
妻	夫の回答について通訳者が確認すると小さくうなづく.	体重管理指導を受け入れているが、消極的な応答で自らの状況を理解してもらいたい.	お菓子を食べていることが非難されることだと理解し、消極的にそれを認める.
夫	助産師の質問に夫がどのようなお菓子を食べているかを答える.	助産師の指導方法を理解し、体重管理の重要性を妻に理解してもらいたい.	助産師の質問に回答することで、助産師の活動に協働することで、指導方法を理解していることを提示する.
通訳者	助産師の質問に夫が答えた内容を妻に確認し、助産師に回答を報告する.	体重管理指導を達成させるために、助産師、夫、妻のタスク、戦略を理解し、発話内容を伝えていく.	妻の消極的な肯定から、妻のタスク、戦略を理解し、それを尊重した形で、NG ワードを産出しない形式で助産師に伝える.

## ② 聞き手になることを選択(#63-68)

#62 の訳出のあと、#63 から妻の発話が始まる。#65,67 で妻は「ずっと食べているわけではない。仕事から戻った時に食べる」と発話し、この間妻は夫に視線をむけている。このことから、ビスケットを食べているという夫の返答に反論し、また、仕事をしていることを述べることで、自らの行為の正当性を主張している。

その間、夫は#66 で「リッツ・ビスケット」とビスケットの何を食べているか詳細な回答を行う。この#63-67 の発話はその発話が完了した後に訳出が行われていない。通訳者は直前の発話を訳出するという規範(飯田 2018)をもっていることから、妻と夫の発話がなされた後すぐに、それらの発話の訳出を行わなければならないが、それがされなかった。なぜならば、#67 の妻の発話の途中で夫が妻の発話にオーバーラップし、それによりターンを取り、#68 の発話を開始してしまったからである。さらに、#68 の夫の発話は、「前置き(preface)シークエンス」(Sacks 1974)としてデザインされている。これは、話し手がこれから語りを語ろうとしていることの予告と聞きうる発話を行い、それによって聞き手がそれを聞く構えを取るかどうかを選択する機会を与えるものである(串田 1999:62)。したがって、通訳者は#68 で夫の発話を「前置き(preface)シークエンス」として受け取ることで、この後に何らの語り語られることを予期し、夫に視線をむけ、うなづくことで、聞き手になることを選択したのだった。そのため#63-67 の訳出を行う位置を確保することが

できなかったのである。しかし、通訳者はただ聞き手になり訳出をしなっただけでない、妻の発話の「完了可能点 (possible completion point)」<sup>9)</sup>において、妻に対してうなずきを送り、妻の発話内容を理解している表示を与えている。この行為は通訳者が訳出をすぐに開始しない理由を妻に提示することにもなっている。すぐに訳出を開始しないのは、妻の発言を聞き取りや理解ができていないからではない、妻の発言内容は十分に理解していることを提示し、別の理由があることを示唆しているのだ。

夫の話の聞き手になることを選択した理由は妻の体重増加について夫と妻の意見に食い違いがあること、夫の最初の質問（出産時の痛みが我慢できるか心配）から派生した食事のとり方に関するトピックの中で行われていることから、夫が何かしらの意見をもっていることが考えられるのである。これは、夫が配偶者として妻の体重管理について語る権限を持つことと関係する。配偶者は、「共にその出来事に遭遇した/すでに聞いている」可能性が高い存在で、夫婦やカップルが他の参加者と共に会話に参加している場合、配偶者などが物語に様々な影響を与える可能性があるとされている（串田 1999）。夫は、配偶者として妻の体重管理について共に対処していくべき立場であり、日ごろからそのように行動していることを示そうとしている。通訳者は、まず、妻にうなずき発話内容を理解している表示を与えて、そのうえで、夫の立場や体重管理についてどのような行動をとってきたかを示す戦略を理解し、訳出という通訳者として最も優先すべきタスクを行うより聞き手になることを選択したといえる。

表 2. ②聞き手になることを選択 (#63-68) 助産師, 妻, 夫, 通訳者の行為・タスク・戦略

参加者	行為	タスク	戦略
助産師	妻の回答（お菓子を食べる）に、驚きの反応をする。	妻のお菓子などの摂取状況の確認と同時に、体重増加の要因を探し、妻に体重管理の重要性を理解してもらう。	体重増加要因のお菓子を食べていることのマイナス評価をおどけたジェスチャーで行い、深刻度を軽減させる。
妻	夫がビスケットを食べると発言したことに対して、自らの見解を述べる。	自らの行為の理由を知ってもらい、行為の正当性を理解してもらいたい。	夫の返答に対し、仕事をしていることを強調し、自らの行為の理由を述べることで正当性を主張する。
夫	夫はビスケットの種類を答える。	助産師の質問意図を理解して、体重管理指導の達成に協働する。	ビスケットの種類を述べることで、助産師の活動を支持し協働する。
通訳者	妻, 夫の発話を聞く。	夫, 妻の立場や主張を理解することで、両者がこの場の活動に積極的に参加できるようにする。	妻の発話直後に訳出を行わずに、夫の発話の聞き手になることを選択。

## ③ 気苦労をする夫を労わる(#68-78)

夫はターンを取り、#68-70で妻はパン1枚しか食べていないと考えているが、パンに塗っているものを含めてどれくらい1日のトータルでどれくらいのカロリーを摂取しているかを計算できていないと述べる。夫は妻の日常の食事状況を説明しているのだが、これは、夫による1日のカロリー計算ができていない妻への間接的な非難であり、同時に夫は注意深く妻を観察しており、妻の体を気にしていることを妻、助産師、通訳者に提示している行為でもあるといえる。というのも、まず、夫の発話の位置が妻の#63-67の発話の後に行われていることから、この発話は、夫の発話(#59)の後に示された妻の抵抗や反論(#64-67)に対する夫の応答であるといえる。そして、その内容は、#63-67で妻は一日中食べているのではないと時間的長さについて述べることで夫の発言に反論しているのに対し、夫は1日の総カロリーが計算できていないことを問題にしている。この場面は、規定以上の体重増加している妻(妊婦)に対して、安全な分娩を行うためにこれ以上体重が増加しないように、どのように食事制限を行うかについて助産師と妻、夫がやり取りを行う場面である。この場面においては、食べている時間の長さよりも一日の総カロリーの方が問題になる。したがって、夫はただ状況説明をしているのではなく、新たな問題点を指摘することによって、妻が体重管理を行えていない状況を助産師、通訳者に伝えており、それが間接的に妻への非難となっているのである。

さらに、この間、夫は、通訳者に視線を送り、通訳者も夫の発話を聞き、反応を示している(#78)。通訳者が訳出を行わず、反応を示し夫の発話を受け止めることで、夫は本心を明かすことができている。このような通訳者の受け止めは、妻の体調を心配する夫の気苦労を労わる行為にもなっているといえる。

表3. ③気苦労をする夫を労わる(#68-78) 助産師、妻、夫の行為・タスク・戦略

参与者	行為	タスク	戦略
助産師	机で記入を行いながら、夫が会話しているのを見聞きしている。	妻に体重管理の重要性を理解してもらう。	夫が自らの意見を話す場を与え、それぞれの立場や考えを理解しあってもらうことを優先させる。
妻	夫の話をきく。	—	—
夫	通訳者、助産師に対して妻が日頃から体重管理ができていないことを説明する。	妻がいかに体重管理できていないかを説明し、夫が日ごろから気にしていることを妻、助産師、通訳者に理解してもらう。	妻の行動を詳細に述べることで、注意深く妻を観察していること、妻の体を気にしていることを提示する。
通訳者	夫の発話を訳出せずに聞き、夫に応答する。	夫のタスクを理解して、夫の訴えを受け取る。	夫の訴えを受け取ることで、夫の気苦労を労わる。



## ④ 夫の発話を受け取ってから、訳出を行う(#78-86)

その後、#78の通訳者の発話の「完了可能点 (possible completion point)」で、夫は視線を通訳者から妻に向ける。それにより、妻はターンを得て発話を行う。しかし、それは夫の発話内容に同意するものではなく、「クラッカー？」と聞き返しを行うものであった。これは、夫が言うカロリーの高い食べ物はクラッカーなのかと確認をすることで、妻が食べているものがカロリーの高い物であると認識していないことを提示しているのである。そして、この発話によって夫は#82-83で直接的に妻に対して注意するという行為がなされたのであった。夫は、日頃から食事には注意していることを冗談めかして妻に言っているが、それは、冗談ではなく本気の発言であり、そのまま受け取るべきことではないと注意しているのだ。そして、この行為は同時に、夫の気苦労の吐露にもなっている。このような会話は、この場だからこそ成立するものといえる。というのも、日頃から注意を促している食事について、専門家（助産師）から必要な指導がなされ、通訳者が発話を受け止めてくれ、適切に助産師に状況を伝えてくれるという状況が成立しているからこそ、夫は本心で話すことができ、妻の食事についてどれだけ心配しているかを示すことができたのである。このような発話を受け止める行為は、第三者であれば誰でもいいのではなく、通訳者だからこそできる行為である。なぜならば通訳者はただ単に受け止めているだけではない。理解を示し、さらに夫や妻が訴えようとしている事柄を適切な形で助産師に伝えるという役割を担っているから、夫は本心で話すことができ、通訳者はその役割を十分発揮しているのである。

この間、通訳者は#82の夫の発話の途中で助産師の方に視線を向け訳出開始のタイミングを探っている。#83の夫の発話が完了し、#84は順番交替に適した場所「移行適切場 (transition relevance place: TRP)」で、通訳者はうなずきながら徐々に視線を夫からずらしていき、#86でターンをとり訳出を開始した。通訳者は、#84で、うなずかず、迅速に訳出を行うこともできたがそうしなかった。通訳者は、夫が妻に対し直接的に注意を行う状況で、まずはうなずくことで、夫がその場で行っている行為の理解を提示し、徐々に視線をずらしていくという配慮を行なった。通訳者は助産師にできるだけ早く訳出を行うというタスクよりも、まずは夫の言い分を受け止めることを優先しているのである。そのような状況を助産師も理解しており、訳出開始を催促せず、夫・妻の発話を行うスペースを与え、それぞれの考えを理解してもらうことを優先させているのである。



表 4. ④夫の発話を受け取ってから、訳出を行う (#78-86) 助産師, 妻, 夫の行為・タスク・戦略

参与者	行為	タスク	戦略
助産師	机で記入を行いながら、妻、夫が会話しているのを見聞きしている。	妻の食事内容を自覚してもらい、体重管理の重要性を理解してもらう。	妻、夫が自らの意見を話す場を与え、それぞれの立場や考えを理解しあってもらうことを優先させる。
妻	夫のいうカロリーの高い者がクラッカー確認する。 夫の発話が中断すると、深く息をすう。	夫の言い分を聞くが、自分の正当性を理解してほしい。	夫の行為（自分に対する非難、注意）を理解し、それに対し否定的な反応を示す。
夫	妻に対して、直接的に、日頃から思っていることを伝える。	体重管理の必要性を妻に理解させ、実行させたいと夫が日ごろから考え行動していることを妻、助産師、通訳者に理解してもらうこと。	妻に直接的に注意をすると同時に助産師、通訳者に自分の気苦労を吐露する。
通訳者	夫の発話にうなずき、受け取りを示す。	夫の言い分を受け取りながら、訳出のタイミングを探る。	助産師への迅速な訳出よりも夫の妻への言い分を聞き、受け取ることを優先する。

## ⑤ 夫の発話内容を要約して助産師に伝える (#86-88)

通訳者は、#68-84 の約 30 秒間のやり取りを #86,87 で逐次通訳ではなく要約を行った。通訳倫理では、話された内容はすべて正確に訳すことが求められるが、この場面では、通訳者はあえて要約という戦略を取った。これは、夫の発話内容を逐次で伝えると、二重で妻に対して効力を与えることになり、妻に対しての影響を鑑みてそのようにしているといえる。それは、#86 の通訳者の発話中、妻が深く息を吸う行為を行ったことで認識できる。この行為は夫が自分を非難したことを認識し、それに衝撃を受けたことを表示しているといえる。

さらに、この要約は話者の意図するものと一致した行為となっている。夫の発話は、妻に対しての注意でありながら、妻の体重増加を心配し、日ごろからそれについて注意をしているという姿勢を助産師に知らせる行為となっている。要約することで、妻に二重の効力を与えないだけでなく、夫が助産師に伝えたい事柄（妻の体重増加について日ごろから注意をしていること）だけを効率的に伝えることができるという、夫のタスクと戦略をよく理解した対応になっているのである。

表5. ⑤夫の発話内容を要約して助産師に伝える(#86-88)助産師, 妻, 夫の行為・タスク・戦略

参与者	行為	タスク	戦略
助産師	通訳者の訳出を聞き、軽く反応を示す。	夫の訴えたいことを受け取るが、妻が体重管理の重要性を理解することを優先する。	夫の訴えたい内容を聞き受け止めの反応は示すが、軽い反応にとどめる。
妻	通訳者と助産師の様子をみている。	—	—
夫	通訳者と助産師の様子をみている。	—	—
通訳者	夫の発話内容を要約して助産師に伝える。	妻に配慮しながら、夫の訴えたい内容、それにより提示しているタスクを助産師に伝える。	妻に二重の効力が及ばないように配慮しながら、夫の訴えたい内容を要約して助産師に伝える。

## ⑥コンフリクトの回避(#88-92)

助産師の#57の質問から始まった連鎖構造で、各々が自らのタスクや主張をするため様々な戦略を参与者たちがとり、それに対して、通訳者が自ら使える資源を用いて対応していることを明らかにした。そして、通訳者はさらに一步踏み込んだ対応をしていくことが観察された。それは、#92,93において、コミュニケーション調整のための介入として自発的発言が行われていることである。まず、#92の自発的発言について分析する。

#86,87の通訳者の発話を受けて、#88で助産師が「で、お菓子も食べているんだよね」と発話し、それに対して#89で通訳者はそれ以前に訳出できなかった情報(リッツを食べていること)を伝える。#88の助産師の発話は、#57の助産師の質問に戻る形式になっている。この間、夫が「ビスケット」や「リッツ」を食べていることは述べられたが、助産師は知らされていない。そこで、何を食べているかを確認するための質問となっている。それは、#89で通訳者が「あ、リッツというのを」と発話し、この発話内容から通訳者がそのように理解して応答をしていることがわかる。「あ、」は何かを思い出したことを示すもので、以前の連鎖の中にその情報があったことを示している。そして、「リッツというのを」と発話し、後半部分が省略されている。その省略されている部分は「食べている」と推測でき、これは、#62で「食べます」と通訳者が述べていることに対応した発話形式になっている。それを聞いた助産師が#91行目で大きな声で「お……………」と発話する。これは「驚き反応のトークン」(Wilkinson & Kitzinger 2006)であり、カロリーの高いリッツを食べていることに対するマイナスの評価を行っているのだが、ややオーバーな反応にすることでその深刻度を下げていると観察できる。そして通訳者は#92で助産師のマイナス評価に対して、妻の食べる行為に合理性があることを示す自発的発言を行う。

#92の「今、まだ仕事としているので。」は、#63-67の妻の発話内容の情報が一部含まれており、訳出できていなかった部分の訳出行為とも考えることができる。しかし、訳出

であれば不完全な内容である。元の情報は「ずっと食べているのではなく、仕事から戻った時に食べる」というものであり、その内容を再現できていない。また、#93では元の情報内容を保持した発話を行っていることから、情報内容を忘れてしまい完全な情報内容の伝達ができなかったと考えることはできない。したがってこの発話は、訳出行為ではなく、通訳者のコミュニケーション調整のための介入として行われた自発的発言だといえる。発話の構成は、「まだ」という副詞を用いて、ある状態・行為が継続しているさまを表し、「まだ仕事としている（仕事をしている）」は、臨月と対比的に使用されていると考えられる。臨月は生理的にも、また、産休に入ることによって食べる機会も増えることから体重が増加しやすい。そのため臨月に入れば体重管理を厳しくしなければならないが、「今」はまだその時期ではない、仕事もしており、カロリーを消化していることを訴えることにより、妻がリッツを食べる合理性を妻に代わって説明する行為となっているといえる。

また、発話の位置を観察すると、「今」が#91の助産師の驚き反応のトークンの直後(#92)で開始され、強く発話されていることから、「移行適切場 (TRP)」での発話交替であるが、すこし前のめり気味で会話を始めており、TRPで助産師にターンがとられないように通訳者が先に発話交替の自己選択をしてターンを取ったと言える。この発話はこの位置において、いかなれば緊急性をもって対処しなければならない問題として対応されていることを表示している。というのも、助産師のマイナス評価が行われたことによって、助産師と妻の間で対立が生じる可能性があり、実際に、これ以前に#63-67の妻の発話に対し、夫による非難や注意が行われていた。同じようなコンフリクトが再現される危険性を回避するために、妻の行為の理由を説明することにより、コンフリクトが生じる可能性を回避したのである。そして、それは、妻と通訳者との間の相互行為においても認識可能なものとして提示されているのである。

表 6. ⑥コンフリクトの回避 (#88-92) 助産師, 妻, 夫の行為・タスク・戦略

参与者	行為	タスク	戦略
助産師	どのようなお菓子を食べているかについての質問を行う。	深刻度を軽減させたマイナス評価で、妻に体重管理の重要性を理解してもらいたい。	食べているお菓子の種類を聞き、驚きの反応を示しマイナス評価を行うが、少しオーバーな反応を示し、深刻度を軽減させる。
妻	助産師, 通訳者の様子をみている。	—	—
夫	助産師, 通訳者の様子をみている。	—	—
通訳者	通訳者の自発的発言で、助産師に対して、妻の状況を伝える。	妻の行為の合理性を説明して、助産師—妻にコンフリクトが発生するのを回避させる。	助産師のマイナス評価に対して、妻のお菓子を食べる理由を述べて、妻の行為の合理性を示す。

## ⑦妻に対する理解の提示(#93)

#92 で通訳者は助産師に対して発話を行ったすぐ後に、#93 で妻に向いて「仕事から帰ってきた後、疲れてちょっと食べたくなるよね？」と発話する。この発話内容は、#63-67 の妻の発話に「疲れて」が付け加えているものである。仕事をしているから疲れ、そのために食べるという妻の訴えようとしている内容を妻に向けて言うことで、妻の立場を理解していることを提示するものとなっている。そして、この発話の終結部で妻に対してうなずき、また、妻もうなずいて口角を上げる行為を行い、通訳者の行為の意図を理解している反応を示すのであった。これらの一連の行為により、この発話は、妻の状況を理解していることを提示する通訳者の自発的発言（コミュニケーション調整のための介入）であると考えられる。通訳者は#92 で緊急的に発話を行い、妻がリッツを食べる合理性を妻に代わって説明することで、妻と助産師間で生じる可能性があるコンフリクトの回避を行った。それだけでなく、#93 で妻に対して妻の立場を理解する発言を行うことで、通訳者が妻の立場を理解していることを明示的に表示し、妻からの助産師のマイナス評価に対する抵抗や反論を封じ込めることに成功しているといえる。それにより、本来のこの場のコミュニケーション課題の達成に指向したやりとり（何をどれくらい食べるかの聞き取りと指導）に戻ることができるようになったのである（#95）。

通訳者は#92 の発話のあと、妻の情報（#63-67）を助産師に伝えることもできたが行わず、あえて#93 で妻に向けての発話を選択したと考える。それは、助産師のマイナス評価は深刻度を下げる形で提示されており、助産師が妻を配慮して発話していることを理解しているからである。そして、この場のコミュニケーション課題は、望ましい体重増加より超過している妻に対して、安全な分娩を行うために体重管理の必要性を妻に理解してもらおうというものであり、そのためには本人の同意・納得が最も必要となる。体重管理の重要性を理解してもらうために助産師と夫はその戦略としてマイナス評価や非難などを行っているが、他方で、通訳者は妻の立場に理解を示し擁護することを、この場の問題を解決する方法として選択されたと考えることができる。4 者がそれぞれの役割を担い、コミュニケーションの課題達成に指向して活動を遂行していったからこそ、通訳者の介入行為がこの場で適切に産出されたと考えられる。

表7. ⑦妻に対する理解の提示 (#93) 助産師, 妻, 夫の行為・タスク・戦略

参与者	行為	タスク	戦略
助産師	通訳者の発話を受け取る.	妻に体重管理の重要性を理解してもらいたい.	妻への評価にたいする反応を受け止める.
妻	通訳者の発話を受け取り, 口角を上げる.	自らの行為の合理性を理解してもらいたい.	通訳者の対応を観察して, 通訳者に同調する.
夫	助産師, 通訳者の様子を見ている.	—	—
通訳者	妻に対し, お菓子などを食べる理由を述べ, うなずく.	妻の状況を理解していることを示すことで, 食事管理の重要性に理解してもらいたい.	妻の状況を妻に対していうことで, 妻の立場を擁護している.

## 6. 考察

望ましい体重増加より超過している妻に対して, 安全な分娩を行うために体重管理の必要性を妻に理解してもらおうというコミュニケーションの課題の達成を指向したやりとりの中で, さまざまなタスクが発生し, その解決に各々が戦略を持ち対応していた. そのような中, 通訳者もそれぞれのタスクや戦略を理解しその都度対応をしていることを明らかにした.

通訳者は自らの最も重要なタスクである訳出を行うことよりも, 聞き手になることや受け止めを優先させる行為を行ったり, コンフリクト回避のため自発的発言を行ったりしていることがわかった. 上述したように, その場で必要とされる介入行為は通訳者だけの力で成り立っているのではなく, 参与者それぞれが, その場のタスク解決を行う上で, 必要な役割を担い, それに伴う戦略を実践する構図の中で, 通訳者はその場で生起する役割を理解し, 協働する中で介入行為を行っているのである. したがって, 通訳者の介入行為は, その場の4者でコミュニケーション目的の達成に指向して, 役割分担を行い, 役割を促進する中で生起されているといえる. ここではもう少し詳細にどのように協働達成の中で介入行為が生起しているかを考察する.

まず, 助産師, 夫, 通訳者は妻に対して常に配慮を行いながら, コミュニケーション課題の達成に指向した行為をおこなっているといえる. 前回の出産経験を踏まえ, 安全な分娩を行う上で必須な体重管理について妻が自覚し, 妻自身が実践を行っていくようにならないといけない. いくら周りが非難や注意を行っても妻自身が積極的に体重管理に向き合わなければ, 適正な状態にはならない. したがって, この場では, いかに妻自身が前向きに取り組めるように理解してもらえるかが最大の課題になっているのである. そのため, この場の参与者が様々な役割を持った相互行為を行っているのである.

助産師は, 専門家として必要な活動(お菓子などの摂取状況の確認)を進める中, 妻がお菓子などを食べていることに対してマイナス評価を行うが, その方法は少しオーバーに



反応することで、深刻度を下げて提示している。というのも、妻は経産婦であり、前回出産時は同じように血圧が上がり危険な状況でもあったことから、体重管理の重要性について全く知らないというのではない。助産師の少しオーバーな反応は、出産経験があり、ある程度知識もある妻に対して、真正面から危険性を伝えるのではなく、そのような知識を知っている者として対応していることが妻にも認識可能となる態度として表示されているのである。

また、通訳者は助産師のマイナス評価に対して、助産師に妻のお菓子を食べる正当性や合理性を代弁するのだが、通訳者自身も助産師の態度を理解しており、助産師に対してそれ以上の行為は行わない。そして、それよりも、妻に対して理解を示すことで、夫からの非難や注意、助産師のマイナス評価が連続してなされた妻を擁護しているのである。この行為は、最小限で行われており、それゆえにコミュニケーション課題の達成を指向しているといえる。

さらに、妻だけでなく、夫に対しても妻の体重管理の共同責任者として、助産師、通訳者は配慮を行っているのである。通訳者は訳出を優先させず、夫の語りの聞き手になったり、夫の吐露する気苦労を受け止めたりしている。また、助産師も夫の語りを通訳者が聞き手になっている間、訳出を促す行為は行わず、夫が語ることを優先させている。このような夫の吐露や妻への非難・注意、妻のそれに対する抵抗などの行為はわがままではなく、専門家の指導という活動の中で、文化や制度的場面の目的を理解している通訳者が、適切に訴えたいこと、理解してほしいことを伝えてくれるという状況があることによって生起されているのである。日頃から心配している妻への思いを率直に述べることは、もしかしたら夫婦喧嘩に発展してしまう可能性がある。そのような危険性を助産師と通訳者がうまく役割分担を行うことによって、夫、妻が安心して話せる状況を作り出し、それを理解している夫、妻が心のうちを話すことができているのである。そのようなコミュニケーション状況を作り出すことに、通訳者の介入行為は役立っているのである。夫妻への配慮がなされず、訳出だけを行うだけではこのようなコミュニケーション状況を作れないだけでなく、医療者や医療機関に対する不信感にもつながる可能性がでてくる。その危険性を食い止め、参与者たちがその場のコミュニケーション課題に指向したやり取りが行えるように、通訳者は介入行為を行っているといえるのである。

このように通訳者の介入行為は、偶発的な産物ではなく、通訳実践の相互行為の中で合理的に組み立てられているものである。幾重にも絡み合った相互行為の中で、参与者たちのタスクや戦略を理解し、その達成に協働しながら、通訳者としてのタスクを完了させていっている。このような通訳者の微細な行為は、Wadensjöが提唱した「renditions」のカテゴリーでは通訳の翻訳機能を重視したものとなっているため、通訳者が行っている文脈依存的で相互反映的である介入行為の実態をとらえていくことが不可能である。なぜならば、通訳者の介入行為が訳出行為を中心とする通訳という営みの逸脱行為だと考えられている限りにおいて、その実態をつかむことができないのである。通訳という行為が発話を



テキストに変換して、テキストレベルで目標言語への変換の等価性を目指す行為であると考えてしまうと、テキストにない発話は、すべて逸脱行為となり、その場のコミュニケーション課題達成に重要な働きを行っていても、「例外的行為」としか認められなくなってしまふのである。対話通訳において、発話のメッセージを忠実に再現するのと同様に、原話話者が受け取る反応を目標言語においても再現させていくことが目指される（Hale 2007 = 2014:18）のであれば、通訳者の介入行為は逸脱行為ではなく、この行為も通訳行為の中心的行為であると考えられるべきであろう。そのような地平に立つことによって、対話における通訳行為全体をとらえることができると考える。

## 7. おわりに

本論では、助産師外来での体重管理指導のやりとり場面で、その場に参与している4者がどのようなタスクを持ちどのような戦略でその場のコミュニケーション課題の達成に向けて指向しているか、そして、4者で協働達成を行おうとしている活動のなかで、通訳者がどのような役割を担い介入行為を行っているか分析した。特に介入行為がどのような状況の中で生起するのか、詳細に記述を行った。それにより、通訳者の介入行為が参与者たちと協働してその場のタスクを完了させ、コミュニケーション課題を達成させるのに大きな貢献をしていることを明らかにした。

通訳者の介入行為は、助産師との協働作業員としてこの場の活動を補完しているものであり、専門家の協働作業を行う上で重要な専門技術として構築していくことが必要であると考えられる。通訳者の行為を言語的変換行為であると認識していると、このような働きを見逃すことになり、良好なコミュニケーションの構築に通訳者は寄与することができなくなる。制度的場面の課題達成に指向した活動ができるように通訳者を育てていくためには、通訳者の日々の実践による積み重ねられた技能を丁寧に記述し、その行為に対して正当に評価していくことが必要である。本研究は、その一端を担うものであり、通訳者の隠れた技能を詳細に記述していくことが、専門技術構築へとつなげていくことになると思われる。また、このような記述を行うことによって、先行研究でなされていたカテゴリー化では、周辺化されてしまう介入行為を、対話通訳において、訳出行為とともに中心的行為であることを明確にすることができた。このことは、テキストレベルで目標言語への変換の等価性を目指す訳出行為偏重に風穴をあけるものになり、あらたな通訳理論構築の地平を開く一歩になると考える。

**【謝辞】** 本研究に協力してくださった通訳者、医療者、妊婦・家族の皆様に厚くお礼申し上げます。また、本研究は、日本学術振興会特別研究員奨励費の助成によって研究を行いました。

【註】

- 1) 社会の成員が日常生活を構成していく際に用いている方法（エスノメソッド）を研究する社会学。1960年代に、米国の Harold Garfinkel らが提唱。
- 2) ここでは訳出方略だけでなくコミュニケーションの調整のための介入も含めるため、戦略という語を使用する。
- 3) Wadensjö は、通訳者が行っている行為の中に介入行為（「non-renditions」「zero renditions」）が含まれることを前提として、翻訳に対応しない通訳者の発言も含めた概念として「renditions」を提唱している。
- 4) Close renditions(等価的翻訳)は、原語と翻訳の命題の内容が等価であり、2つの発話のスタイルはほぼ同じであるもの。Expanded renditions(拡張翻訳)は、元の発話よりも明確に追加された表現された情報が含まれるもの。Reduced renditions(縮減翻訳)は、元の発話よりも明確に表現されていない情報が含まれるもの。Substituted renditions(代替翻訳)は、拡張されたレンディションと縮小されたレンディションの組み合わせされたもの。Summarized renditions(要約)は、2つ以上の元の発話に対応する翻訳、Two part or multi part renditions(複数構成翻訳)は、1つの元の発話に対応する2つの通訳者の発話で構成されるものである。
- 5) 日本産婦人科学会・日本産科学会「産婦人科診療ガイドライン—参加編 2017」では、個人差はあるが、妊娠前より+11 kgが推奨されている。  
<https://minds.jcqhc.or.jp/docs/minds/Obstetrical-practice/Obstetrical-practice.pdf>  
(2020.9.19 アクセス)
- 6) 通訳者は出身国で理学療法士の資格を取得し医療機関で勤務経験を持つ。また、日本で医療通訳研修を受けており、自治体の医療通訳派遣事業に登録し、勤務病院以外での通訳経験も多数ある。
- 7) このトランスクリプトの作成は、以下の手順を追って行った。まず、録音音源をテープ起こし業者によってテープ起こしを行い（素起こし）、その後、プロのポルトガル語—日本語通訳者による映像翻訳と詳細な会話の書き起こしが行われた。そして、最後にデータの通訳者に録画データとトランスクリプトを見てもらい発言内容の確認をしてもらい、最終的に筆者がELANソフトを使用し確認を行った。
- 8) データ採録した他のケースにおいても、体重増加している妊婦に対して、お菓子や甘い物を食べているかの質問が行われていた。
- 9) 発話順番が終わりそうだと聞き手がわかる地点のことを完了可能点という（串田他 2017 : 121）。

【引用文献】

Angelelli, C. V., 2004, *Medical Interpreting and Cross-cultural Communication*, Cambridge : Cambridge University Press.

- Angelelli, C. V., 2011, 「多言語社会における通訳者の役割」 武田珂代子訳, 鳥飼久美子・野田研一・平賀正子・小山亘編『異文化コミュニケーション学への招待』みすず書房, 417-433.
- Cirillo, L.C., 2012, *Managing Affective Communication in Triadic Exchanges: Interpreters Zero-renditions and Non-renditions in Doctor-Patient Talk* C.J. Bidoli (Ed.) *Interpreting across Genres: Multiple Research Perspectives. Project: Dialogue interpreting in institutional settings*: EUT, 102-124.
- Hale, Sandra Beatriz, 2007, *Community Interpreting*, Hampshire: Palgrave Macmillan.  
(飯田奈美子編, 2014, 『コミュニティ通訳——オーストラリアの視点による理論・技術・実践』文理閣.)
- 畑下博世編, 2010, 『日系ブラジル人母子サポートマニュアル』(財) 滋賀県国際交流協会.  
[http://www.clair.or.jp/j/multiculture/docs/shiga\\_boshihoken.pdf](http://www.clair.or.jp/j/multiculture/docs/shiga_boshihoken.pdf) (2020.9.19 アクセス)
- 飯田奈美子, 2016, 「対人援助におけるコミュニティ通訳者の役割考察——通訳の公正介入基準の検討」立命館大学大学院先端総合学術研究科課程博士学位請求論文.
- 飯田奈美子, 2018, 「対話通訳における逸脱行為の考察——新生児訪問模擬通訳の会話分析から」『通訳翻訳研究』17: 1-22.
- 伊藤美保・中村安秀・小林敦子, 2004, 「在日外国人の母子保健における通訳の役割」『小児保健研究』63(2): 249-255.
- 串田秀也, 1999, 「共有知識と経験への権限——物語りににおける参与の組織化の一局面に関する試論」『大阪教育大学紀要』47(2): 59-81.
- 串田秀也, 2006, 「会話分析の方法と論理——談話データの『質的』分析における妥当性と信頼性」『方法——講座社会言語科学』第6巻, ひつじ書房.
- 串田秀也・平本毅・林誠, 2017, 『会話分析入門』勁草書房.
- Sacks, H., 1974, *An Analysis of the Course Of a Joke's Telling in Conversation*, in R. Bauman & J. Sherzer (eds), *Explorations in the ethnography of speaking*. London: Cambridge University Press. 337-353.
- Sacks, H., 1992, *Lecture on Conversation*. Oxford: Blackwell.
- Schegloff, E.A., 2007, *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 新崎隆子, 2010, 『通訳のコミュニケーション調整仮説——英日逐次通訳の事例から』青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻 2010 年度博士論文.
- 杉浦絹子, 2008, 「育児中の在日ブラジル人女性の日本の母子保健医療に対する認識とその背景——日本の母子保健医療の課題に関する考察: 第1報」『母性衛生』49(2): 236-244.
- 杉浦絹子, 2009a, 「育児中の在日ブラジル人女性の日本の母子保健医療に対する認識とそ

- の背景——日本の母子保健医療の課題に関する考察：第2報』『母性衛生』50(1): 57-63.
- 杉浦絹子, 2009b, 「育児中の在日ブラジル人女性の日本の母子保健医療に対する認識とその背景——日本の母子保健医療の課題に関する考察：第3報』『母性衛生』50(2): 267-274.
- 高橋里亥・古川洋子・正木紀代子・芦田美樹・大林 露子, 2007, 「滋賀県における在日ブラジル人女性の妊娠・出産・産後のケアに対する調査」 『人間看護学研究』(5): 57-71.
- Wadensjo, C., 1998, *Interpreting as Interaction*, London and New York :Longman.
- Wilkinson, S. and Kitzinger, C. ,2006, Surprise as an Interactional Achievement: Reaction Tokens in Conversation, *Social Psychology Quarterly*, 69: 150-182.
- 山下正・松尾博哉, 2012, 「保健師による外国人への母子保健サービス提供の現状と課題——愛知県の市町村に勤務する保健師へのアンケート調査の分析から」 『国際保健医療』27(4): 373-380.

【付記】会話トランスクリプトの記号凡例

[	発話の重なるの始まる点	(.)	0.2秒以下の短い沈黙
<u>下線</u>	強い音	<u>太字</u>	さらに強い音
,	発話が続くイントネーション	.	発話が終わるイントネーション
不明	聞き取り困難発音	><	早い発話
° °	小さな音	↑	音調が上がる
+	行為が始まる位置		
-----	視線の対象者（イニシャル）と視線の向き		
:	音の伸ばし. コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している.		
h	呼気音. hの数はそれぞれの音の総体的な長さに対応している.		
()	筆者日本語訳の補足		
=	二つの発話が途切れなく密着していること.		

\*\*\*\*\*

【編集後記】『現象と秩序』第15号をお届けします。今回もまた、社会学、民俗学、言語学といったさまざまな分野からご投稿いただきました。

第1論文は、子育て中の大学教員のワーク・ライフ・バランスに関する論考です。聞き取り調査からその実態が明らかにされており、(子育て中の身にとっては)ロールモデルとして興味深く、また、研究活動をどう位置づけるべきかという著者の問いも考えさせられます。

第2論文は、通訳者が相互行為のなかで行なう介入行為とその意義について、会話分析から明らかにしています。在日外国人が助産師外来を受診する場面における通訳者の巧みな介入行為が、参加者の相互行為と課題を達成するダイナミズムが見えてきます。

第3論文は、愛知県三河地区の「赤引糸」および「お糸船」の伝統を支えてきた人びとの軌跡を記録したものです。また、高齢化が進み存続の危機に瀕する共同体の伝統を、どのようにして維持していくかという問題にも切り込んでいます。

第4論文は、節分に豆まきをしないという習俗をもつ地域のフィールドワークの成果です。その習俗の単位(家単位、地域単位等)や赤鬼法性院伝説との関連、そして単位と伝説との関連性についてなど詳細に考察されている、粘り強い調査研究の賜物だと思われます。

第5論文は、普通体の会話の中で丁寧体が出現する「アップシフト」という現象を、漫才のデータを元に考察しています。日常生活のなかで見出せる素材のおもしろさもさることながら、その分析の鋭敏さも読みごたえがあります。

第6論文は、今年開催された「東京2020オリパラ競技大会」における参加資格問題について、人権社会学の見地から考察しています。この問題を「パスする日常」の妨害という観点で切り込み、今年の「オリパラ」が、むしろインクルージョンの徹底に向けての諸工夫を無視した時代逆行的存在であった可能性を示唆しています。

ぜひご堪能ください。(H.Y.)

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会(2021年度)

編集委員会委員長：堀田裕子(愛知学泉大学)

編集委員：檜田美雄(神戸市看護大学)、中塚朋子(就実大学)

編集幹事：川上陵哉(神戸市外国語大学)

編集協力・印刷協力：村中淑子(桃山学院大学)

『現象と秩序』第15号 2021年10月31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 檜田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (檜田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>